

〈特別講演〉

CARPE DIEM —— 文芸シャンソンに魅せられて ——

松 島 征

2006年5月13日、京大会館において開催された〈京都大学フランス語学フランス文学研究会〉にゲスト・スピーカーとして招かれ、元の同僚・後輩たちを前にして、約90分にわたり〈文芸シャンソン〉の魅力について語り、わたしの好きなシャンソンをCDでたっぷり聞いていただく、という機会にめぐまれた。以下にお目にかけるのは、その時の講演の概要である。

なお、標題として掲げたラテン語「カルペ・ディエム」« CARPE DIEM »は、古代ローマの詩人ホラティウスの『オード』に用いられている文句で「(今日という)日を摘め」という意味である(フランス語では« Cueille le jour »)。英語では« Seize the day »と訳されるが、アメリカの作家ソール・ベローはこれを表題とする小説を書いた。『今を生きる』というアメリカ映画を見た人もいだろう(原題は« Dead Poets Society »)。「CARPE DIEM」は、古代からルネサンスを経て現代に脈々と伝わる、重要な文学的トポスのひとつであった。わたしはこの文句をわが後半生の座右の銘としよう。「一刻一刻を大事にして悔いのない余生を送ろう」という意味において。

最初に、わたしとシャンソン・フランセーズとの半世紀に及ぶ長い付き合いを簡単にふりかえってみたい。

第Ⅰ期(1957-1970)：シャンソン開眼

ニキビ面の高校生時代にシャンソン・フランセーズの魅力にとりつかれる。フランス語の歌詞の意味もよくわからないままに、シャンソン歌手(とりわけイヴ・モンタン)の洗練された芸に魅了された。新日本放送(現在の毎日放送)で、伊吹武彦先生の「唄うフランス語講座」を毎週聴き、「メケメケ」「わたしの心はヴァイオリン」「ジェルソミーナ」などの曲目に親しみを覚えた。京大文学部でフランス文学専攻に進み、ますますシャンソンに傾倒するようになる。当時よく聴いたのは、モンタン Yves Montand, イヴェット・ジロー Yvette Giraud, グレコ Juliette Gréco, カトリーヌ・ソヴァージュ Catherine Sauvage, ジルベール・ベコー Gilbert Bécaud などである。

第Ⅱ期(1971-1990)：文芸シャンソンに魅せられて

当初、文芸シャンソンとしては、モンタン、グレコ、ソヴァージュらがレパートリーとするブ

レヴェール Jacques Prévert の詩（「バルバラ」「手回しオルガン」「鯨とり」など）に惹かれたものである。プレヴェールの詩の朗読者としては、レジアニ Serge Reggiani が最高だと思う。

1971-72年のパリ留学を機に、ブラッサンス Georges Brassens のシャンソンの魅力にとりつかれる。実際、彼の詩的テキストは他に類を見ない含蓄に富んだものであった。手前みそになるが、それだけわたしのフランス語理解が上達した、ということの意味する。ブラッサンスのテキストがわかるようになるには、相当なフランス語の運用能力が必要とされるからである。彼のテキストは、俗語・綺語・言語遊戯・ペダントリーにあふれていて、一度聞いただけではその良さが理解できない。何度もくりかえし聞いているうちに「なるほど、そういうことなのか」とじわじわと彼の意図が伝わってくるのである。その意味では、初学者にもすぐ理解できる単純明快なプレヴェールのテキストとは好対照であろう。

ブラッサンスのほかには、バルバラ Barbara, ムスタキ Moustaki, レオ・フェレ Léo Ferré, エレーヌ・マルタン Hélène Martin, ブリジット・フォンテーヌ Brigitte Fontaine らのシャンソンに傾倒していた。フランス留学から帰国し、フランス語教員のポストに就いてから、『基礎フランス語』（三修社）という語学雑誌に3年連続で文芸シャンソンについてのエッセーを書いた。そのほか、白水社の『ふらんす』やNHKの『ラヂオ・フランス語講座』などにも頼まれてシャンソンの記事を書いていた。

第Ⅲ期（1990-2005）：シャンソンとワールド・ミュージック

1970年代後半以降、シャンソンの伝統的なスタイルは若者たちにそっぽを向かれ、ジャズ・ロック・ボサノヴァ・ラテン音楽（レゲエ）などの外来のリズムが、フランスのポピュラー音楽界を席卷するようになる。この時流に乗ってヒットソングを連発したのがゲンズブール Serge Gainsbourg である。ムスタキもまた、インド音楽・ブラジル音楽・フラメンコなどを大胆に取り入れて曲を作った。ボサノヴァについては、トム・ジョビンの親友バルー Pierre Barroux やレー Francis Lai などがいる。ラヴィリエ Bernard Lavilliers は、サンバ・サルサのリズムで大衆の人気を博した。ラップの世界では、M.C.ソラル M.C. Sollars, トントン・ダヴィッド Tonton David らが活躍している。またアルジェリアの大衆歌謡ライの歌手たちも、大都市郊外住民を中心に人気を集めている。

この時期のわたしは、NHKラヂオ・フランス語講座応用編講師として、また朝日カルチャーセンター講師として、異文化の集合体としてのシャンソンのもつ文化記号論的役割をアピールしようとしていた。わが国のシャンソン・ファンの大多数を占める「シャンソン＝恋の歌」というステレオタイプから生じる誤解を正し、シャンソン・フランセーズの実情を少しでも理解してもらおうと試みていたのである。

第Ⅳ期（2005以降）：文芸シャンソンへの回帰

しかしながら、もとを正せばわたしとて「フランス文学者」のかたわれである。音楽の記号論も悪くはないが、シャンソンの最大の魅力は、行き着くところやはりなんといってもその言葉（つまりフランス語）にある。ブラッサンスの歌詞に見られるように、テキストにユーモアやウィットやイロニーなどの毒がなければ、シャンソン・フランセーズの名に値しないのではあるまいか、という思いがますます強くなってきた。そういうわけで、今日はこの場を借りて、「わたしの文芸シャンソン・ベストテン」をみなさんに聞いていただこう、と思う。その一番手は、

1 〈そのつもりでも〉 Raymond Queneau, *Si tu t'imagines* (1946)

この歌には思い出がたっぷりある。まずグレコが歌手としてデビューしたときの、数少ないレパートリーのひとつであった、ということ。グレコは、哲学者サルトルのもつクノー詩集の中からこの詩を選び、彼から作曲家コスマを紹介してもらった、とその自伝で述べている。上記の語学雑誌『基礎フランス語』での文芸シャンソン記事連載の第1回目に、わたしはこの歌について書いた。それは同時に「CARPE DIEM」というトポスの発見でもあった。

2 〈カッサンドラに捧げるオード〉 Pierre de Ronsard, *Ode à Cassandre* (16世紀)

“Mignonne, allons voir si la rose...”という出だしで有名なこの詩は、ルネサンス期プレイヤード派の重鎮ロンサールによる「カルペ・ディエム」をテーマにすえた傑作である。多数の音楽家、歌手が、この詩に作曲し、演奏しているが、今日はエスパーニャの歌姫ミランダ Anna-Maria Miranda の歌唱を聴いていただこう。

3 〈マルキーズ〉 Corneille / Tristan Bernard, *Marquise* (17-19世紀)

「カルペ・ディエム」をテーマにすえた傑作といえ、劇作家コルネイユの書いた12行詩に、現代の作家ベルナールが4行のオチを付けた〈マルキーズ〉を忘れてはならない。このテキストは、上記2つの「カルペ・ディエム・ヴァージョン」の逆をゆくもので、年配者からの忠告をはねつける若い女の心理がよく出ている。これは作曲者ブラッサンスの歌唱に止めをさす。

4 〈幸せな愛はない〉 Louis Aragon, *Il n'y a pas d'amour heureux* (1946)

これはアラゴンが愛妻エルザ・トリオレに捧げた連作詩篇のひとつなのであるが、ドイツ軍占領下の暗い時期に書かれたためか、苦汁に満ちた愛の告白である。ブラッサンスは、5聯あるこの詩の第5番目を歌わない。「祖国に対する愛」 amour de la patrie という表現がアナキストに忌避されたのであろうか…。あるいは、「ほんのちっぽけな歌のためにどれだけの不幸が必要か／ひとつのギターの調べのためにどれだけの嗚咽が必要か」と、第4聯において「詩（シャンソン）創作の秘密」が開陳されたので、あとは蛇足と想着て歌うのをやめたのか…。

5 〈死刑囚〉 Jean Genet, *Le condamné à mort* (1942)

サルトルの主著『聖ジュネー殉教と反抗』で名高いジャン・ジュネの詩にエレーヌ・マルタンが作曲して自ら歌っているもの。社会的にはいまだにタブーとされる〈同性愛〉と〈死〉をテーマにし、戦慄的で危険なメタファーの美学に支えられた傑作である。「好きなときに歌いたいただけこの詩を歌いなさい。あなたのおかげでこの詩は燦然と輝いている」と、あの気難しそうな詩人からお墨付きをいただいたほどの見事なメロディ。

6 〈ブルネットの婦人〉 Georges Moustaki, *La dame brune* (1969)

民謡“*Au clair de la lune*”からインスピレーションをえて作ったシャンソンを、作者ムスタキがバルバラとデュオで歌う。〈愛の成就〉と〈詩の誕生〉という、すぐれてボードレールの文学的トポスを組み合わせたシャンソン。これを越えるものはこのジャンルでは存在しない、といってもよいほどの傑作。バルバラが鬼籍の人となってしまった現在、この歌はもう二度とコンサートで歌われることはないだろう。

7 〈「枯葉」に寄せて〉 Serge Gainsbourg, *La chanson de Prévert* (1961)

くせ者ゲンズブールが、プレヴェール／コスマのコンビによる名曲〈枯葉〉に捧げるオマージュ。「シャンソンの〈枯葉〉を聞くたびに／きみはぼくの記憶にのみがえる／死んだはずの恋が／いつまでも死にきれないでいるのだ」とぼやきながら、その一方で先輩たちの作った名曲を賛美するのである。この歌といい、〈ラ・ジャヴァネーズ〉*La Javanaise*といい、ゲンズブール初期のシャンソンは流麗なメロディをもってますねエ。

8 〈ジュリエットの饗宴〉 Juliette, *Le festin de Juliette* (2002)

ブルトンが聞いたら『黒いユーモア選集』に載せずにはいられないほどのブラック・ユーモアの傑作シャンソン。ジュリエットの主催する晩餐会は、家具調度食器すべて黒ずくめ、テーブルに出る料理もすべて黒で統一されている。みなさんの召し上がっているお肉とスープは、わたしジュリエットの血と肉ですよ、というおどろおどろしい内容の歌。この歌の作者にして歌手のジュリエットはグレコとは別人の女性。アルジェリア出身のまるまる太ったおばさんである。

9 〈赤い星〉 Frank Giroud, *L'étoile rouge* (1998)

「赤い星」というバーの年老いたマダムが、若き日の革命戦士たちのことを回顧するシャンソン。パブロやアンナやワシリエフ、あの赤い闘士たちはもういない。未来を夢見ていたあの人のたちのことを忘れてもいいのだろうか、という革命的ロマンチズム（センチメンタリズム？）。ジュリエットは、この歌の作曲とピアノ演奏と歌唱を担当している。

10 〈枕の上で〉 Juliette, *Sur Poreiller* (1998)

「エロティスムとは死にまで至る生の称賛である」というジョルジュ・バタイユの名文句を彷彿

佛とさせる、デカダンスと悦楽にむせかえらんばかりの傑作。味覚・嗅覚・触覚によるシネステジーが、聴くものをボードレールの詩的乾坤へ、さらにはブルーストのロマネスク時空へと誘う。作詞・作曲ともにジュリエット。彼女のピアノ独奏による弾き語りがすばらしい。

以下の文章は今年（2006年）の二月から三月にかけて、神戸新聞夕刊の「随想」というコラムで三回に分けて掲載されたものである。いささか蛇足の気味はあるが、みなさんにお読みいただければ幸いである。

シャンソンの魅力（2006年2月3日掲載）

高校生の時代からシャンソンを聞いて、やがて五〇年になろうとする。当時はモンタンやグレコの黄金時代であった。今でもグレコは大好きだ。だが、好きなシャンソン作者を三人挙げよと言われたら、プレヴェール、ブラッサンス、ムスタキの名が浮かぶ。

各地のカルチャー・センターやNHKラヂオ講座の講師として、シャンソンの魅力を語り、エッセーにも書いて来た。その中でくどいほど繰り返してきたのは、「愛の賛歌」や「枯葉」のようなおセンチなものだけがシャンソンではない、ということである。権力者や宗教家をからかう歌、反戦ソング、社会的弱者に同情する歌、世相に対する嘆き節、ノスタルジー・ソング、民謡童謡など、シャンソン・フランセーズにはじつに様ざまの表情がある。ゲンズブールやレオ・フェレの作品のように、非情なまでにドライなものもある。わが国のシャンソン・ファンと称する人たちの多くは、シャンソンの全体像のごく一部しか見ていない。

そんなわけで、わが国のファンが知らない側面を紹介することに努めて来た。たとえば、反骨の詩人ブラッサンスのタブー表現をちりばめた歌（ラヂオでは放送できないような内容）、ボリス・ヴィアンの反戦歌、シュルレアリスムの流れを汲むプレヴェールの歌などである。歌の題材や内容だけではない。たくみに語呂合わせを生かしたシャンソンも多数存在する。たとえば、ゲンズブール、ルノー、デュティユ、ボリス・ヴィアン、ムスタキなどの言葉遊び歌。とりわけ、ブラッサンスの「コンの歌」（原題“時を経ても事態は変わらぬ”）は傑作。これはフランス映画『奇人たちの晩餐会』 *Le dîner des cons* のテーマ・ソングに用いられていた。

シャンソンと複数文化（2006年2月20日掲載）

一口にシャンソンと云っても様々なスタイルがある、と前回述べた。シャンソンの多様性は、テーマの複数性につきない。西洋社会中心の歴史観が崩壊し、第三世界が台頭するにつれて、シャンソンの歌詞を支える音楽にも大きな変動が生じた。複数文化（文化多元主義）の視点から、世界各地の民族音楽が現代シャンソンに及ぼした影響について述べておきたい。

アメリカの大衆音楽であるジャズは、第二次大戦後、まるで堰を切ったかのようにフランスのポップ・ミュージックに氾濫を開始する。ボリス・ヴィアン、トレネ、ブラッサンス、モンタン、ベ

コー、アズナヴァールらが競ってジャズ風のノリで歌う。やがてボサノヴァが割り込んでくる。その代表が、映画『男と女』の主題歌。黒人のソウル・ミュージック（ブルース）の影響も忘れてはならない。現代におけるその代表はパトリシア・カースであろう。彼女はエディット・ピアフの再来とも言われている。ロサンゼルス郊外発祥の街頭唱法ラップもまたフランスで大流行している。テキストが最もフランス風に洗練されているラップ歌手はMCソラール（アフリカ出身）であろう。

ラテン音楽の影響も大きい。古くはアルゼンチン・タンゴ。戦後は、マンボ、カリブソ、ルンバ、チャチャチャ、サンバなど枚挙にいとまがない。サンバとサルサの歌い手としてはベルナール・ラヴィリエという大物がいる。最初にレゲエをフランスに導入したのは〈聖なる怪物〉ゲンズブールであった。

現代シャンソンの文化多元主義を代表する歌手はだれかと聞かれたら、〈ヒッピー族の元祖〉ムスタキおよび〈異星人〉ブリジット・フォンテーヌの名を挙げよう。ともに還暦を過ぎてなお、カリスマ性を発揮し活躍を続けている。

シャンソンの文学性（2006年3月7日掲載）

そもそもわたしがシャンソンに惚れこんだのは、その文学性のためであった。大学生になって最初買ったLPレコードがシャンソン。モンタンの歌う「さくらんぼの実る頃」、ジローの歌う「ミラボー橋」などをレコードが擦り切れるほどに繰り返し聞いた。鼻にかかる甘い母音の響き、子音との絶妙のハーモニー、脚韻のかもしれない出ず余韻などに酔いしれたものである。

音響効果だけではない。歌詞のテーマの複雑さにも魅了された。たとえば「さくらんぼの実る頃」の表面上のテーマは〈カルペ・ディエム〉すなわち〈その日を生きよ〉である。ところがのちになって「パリ・コンミューヌの看護兵ルイズに捧げる」という献辞が付けられたことからわかるように、この詩は〈政治的挫折〉と無縁のものではない。つまりこのシャンソンはフランスの民衆にとって歴史的文化遺産でもある、ということだ。

〈カルペ・ディエム〉というテーマは、ヨーロッパの文学作品を貫通する重要なトpos（場）でもある。レーモン・クノーの詩にジョゼフ・コスマが曲をつけた「そのつもりでも」は、ジュリエット・グレコのデビュー・ソングであるが、これはルネサンス期の詩人ロンサルがその恋人カッサンドラに捧げたオード“Mignonne, allons voir si la rose ...”のパロディだ、と言ってもよいほどに詩想が似通っている。

よくシャンソンとは「三分間のドラマ」であると言われるが、演劇性だけがその魅力ではない。フランス語独特の洗練された言葉遣い、洒落たユーモア、寸鉄人を刺すイロニー、これらの要素は日本語の訳では表現できない。たとえば、ブラッサンスの歌うシャンソンの大部分は日本語に翻訳不可能。でも例外はある。古賀力訳による「ビストロ」は、パリの場末の酒場を東京の下町に置き換えて、みごとな効果を上げている。「止まり木を斜にかまえ／眺めるママは／はきだめの白鶴か／賀茂鶴か」なんて一節は原文にあるわけがないが、「白鶴／賀茂鶴」の洒落がなんとも心憎い。